Practice of Network

取材日:2018年1月19日







横浜北部医療圏

「生活習慣病センター」開設に合わせて 生活習慣病の地域医療連携システム構築をめざす。

Point of View

- ① 横浜市神奈川区の生活習慣病医療連携の中核となるべく「生活習慣病センター」を開設
- ② 強固な紹介―逆紹介の関係構築のためにセンター専用紹介状、生活習慣病医療連携パスの作成を予定
- ③ センターでは、常に地域の医師の意見をとり入れ、ニーズに応える

社会福祉法人恩賜財団 済生会神奈川県病院 糖尿病内分泌内科部長

臼井 州樹先生

医療法人社団若梅会 さかきばらクリニック 院長

榊原 映枝先生

いわた内科クリニック 院長

岩田 篤人先生

医療法人MYクリニック 院長

神戸 博紀先生

医療法人財団俊陽会 古川病院 理事長/院長

古川 健太郎先生

横浜市神奈川区に特化した 生活習慣病センターを構想

済生会神奈川県病院(以下、県病 院)は、2018年春、生活習慣病セン ター(以下、センター)を開設する。 センターを牽引する糖尿病内分泌内 科部長の臼井先生に経緯をうかがっ た。

「横浜市神奈川区の先生方に生活習 慣病の患者さんの主な紹介先を確認 したところ、当院と済生会横浜市東 部病院(以下、東部病院)、横浜市 立市民病院、横浜労災病院、けいゆ う病院の名が挙がり、これら5病院 がほぼ同等の紹介率でした。そこで 唯一、神奈川区にある当院が、地域 の生活習慣病医療連携の中核となる

べく、センターの開設を決めたので す」(臼井先生)

センター開設にあたっては、東部 病院とのすみ分け、差異化について 熟考したそうだ。

「ひとつには、神奈川区に特化した センターにすること。もうひとつは 高度急性期医療をカバーする東部病 院に対して、急性期から回復期まで を担う当院だからこそ可能な医療を 手厚くすることです。

たとえば、重度の高血糖で入院し た患者さんにインスリン強化療法を 行うと1週間から10日程度で糖毒性 が解除され退院可能となります。た だ、退院後に活動量が増え、低血糖 を起こすケースがしばしばあり、注 意が必要です。



左から臼井先生、榊原先生、岩田先生、神戸先生、古川先生



したがって当センターでは、退院 後、しばらく当院の外来に通院して いただき、低血糖がなく、症状が安 定していることを確認してから、地 域の医療機関にお返しすることを検 討しています」(臼井先生)

「糖尿病センター」ではなく、「生 活習慣病センター」としたのは、糖 尿病とその合併症を中心に診るもの の、消化器内科による主に脂肪肝、 呼吸器内科による主に睡眠時無呼吸 症候群 (SAS) などの診療も視野に 入れたからだという(【資料1】)。

地域の医師たちのニーズに 可能な限り応える姿勢で

「当センターが地域のニーズにきち んと応えられるようになるには、連 携する病院、診療所の先生方のご意 見が欠かせません」(臼井先生)

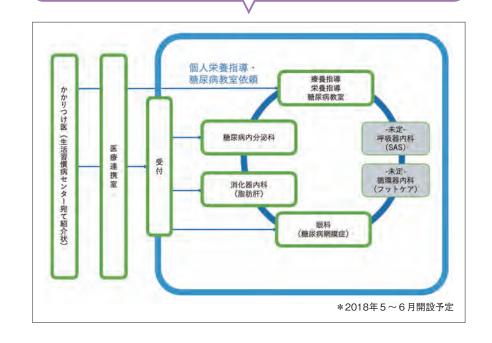
神奈川区内の古川病院院長の古川 先生は糖尿病専門医だが、専門医療 機関と連携する必要性を感じるケー スはたびたびあると話す。

「当院でも糖尿病の診断、治療、合 併症の検査及び管理は可能で、入院 患者も受け入れていますが、糖尿病 の専門知識を有するスタッフの人数 が十分ではありません。コントロー ルの悪い患者さんの教育入院などを センターにお願いできるなら、ぜひ 利用したいと思います」(古川先生)

診療所の医師、非専門の医師にあ っては、さらにセンターに対する期



生活習慣病センター構想



待は大きい。循環器内科を専門とす る神戸医院院長の神戸先生は、広く 内科全般の診療を行っているが、特 に糖尿病患者は多いそうだ。

「大半の患者さんは軽症ですので、 当院内で診療を完結できますが、合 併症のチェックや専門医への紹介の タイミングなどにおいて判断に迷う 場合があります。また、インスリン 管理中の症例の2割程度でコントロ ールが難しく、専門医に診ていただ けると助かります」(神戸先生)

消化器内科が専門の、さかきばら クリニック院長の榊原先生と、循環 器内科が専門の、いわた内科クリニ

> ック院長の岩田先生が 続ける。

> 「眼科の検査や栄養指 導、糖尿病教育を外来 で一括して行っていた だけるとありがたいで す。また、我々非専門 医が診ている糖尿病の 患者さんの多くは、好

ましい生活習慣がなかなか長続きし ません。ですから教育入院は、初発 の患者さんだけでなく、罹患して長 い患者さん向けの、リフレッシュ指 導的なプログラムもほしいところで す」(榊原先生)

「患者さんの中には、症状の悪化や 重大な合併症があっても、馴染みの ない病院に行きたがらない方もいま す。そうした患者さんに、新しいセ ンターに行けば、『糖尿病の最新の 情報が聞けますよ』、『糖尿病の人間 ドックのような検査があるので、一 度、気になるところを全部診てもら ったらどうですか』といった、今ま でとは違う働きかけができるように なるといいですね」(岩田先生)

こうした地域の医師の要望を、セ ンターはきめ細かくとり入れていく 姿勢だ。

「軽症の患者さんに対し、いつ、ど のような合併症チェックが必要かな ど、気になることは遠慮なくいつで もセンターの専門医にご相談くださ



い。必要な検査はすべてセンターで 行い、栄養指導やピンポイントでの インスリンの調整もお任せいただい て大丈夫です。

教育入院については血糖管理中心 の詰め込み指導型ではない、患者さ ん自身の気づきを促すプログラムも つくっていく計画です」(臼井先生)

センター専用紹介状の 作成と配布を思案中

臼井先生は、センター開設に合わ せて、従来の紹介―逆紹介より密度 の濃い生活習慣病医療連携システム の確立をめざす。そのための方策の ひとつとして思案中なのが、センタ - 専用紹介状の作成と配布だと明か してくれた。

「もちろん従来の一般的な紹介状で もけっこうですが、簡便なチェック ボックス式の専用紹介状があったら

【資料2】

使い勝手がいいの ではないかと考え ています。地域の 病院や診療所の先 生方にはかえって 手間がかかり、ご 面倒でしょうか」 (臼井先生)

「専用紹介状で、 必要な検査や指導 を自由にチョイス できるスタイルな ら、とても良いと 思います」(榊原 先生)

岩田先生も同様 の意見を述べる。 「専用紹介状があ れば便利に違いあ りません。これま でも栄養相談や骨 密度検査などの専 用シートを利用していますが、患者 さんたちにも好評です。紹介状のチ エック項目には、各種検査、各種指 導などの項目を並べ、自由に選べる とともに、『すべて選択』など、ま とめて選べる項目があると使いやす いですね」(岩田先生)

「専用紹介状をつくる際には、でき る限り地域の先生方の負担にならな いものにするつもりです。貴重なご 意見をいただき、ありがとうござい ました」(臼井先生)

生活習慣病医療連携パスは 実用性、普及、継続が課題

生活習慣病医療連携システムを確 立し、患者を円滑に循環させるには、 医師同士をつなぐセンター専用紹介 状のほかに、医療スタッフや患者も かかわる連携のツールが有効だと臼 井先生は考えている。

「肝心なのは、糖尿病患者に、かか りつけ医と専門医のいるセンターと の両方で受診するのが当たり前だと 思っていただくこと。

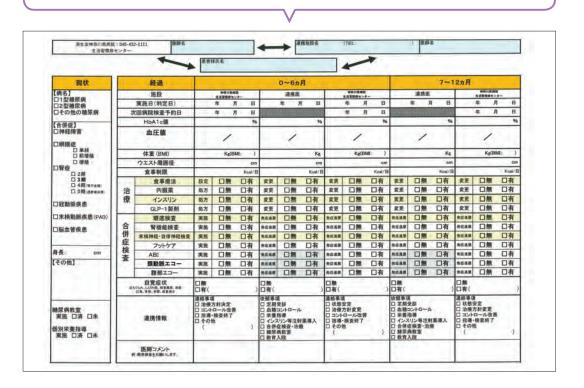
それには、医師や医療スタッフ、 患者さんも簡単に扱え、しっかりと 情報共有できるツールが必要です | (臼井先生)

臼井先生は、前任地の勤務医時代 に作成し運用していた「糖尿病医療 連携シート」(以下、連携シート) を叩き台とし、現在、「生活習慣病 医療連携パス」(以下、連携パス) (【資料 2】) を作成中で、センタ ー開設時には試験運用がスタートす る予定だ。

「前任地の連携シートは、医療機関 同士の情報共有とスムーズな連携を 目的に運用していました。

当センターで新しく作成する連携 パスは、ゴール設定をとり入れ、患 者さん自身が主体的に生活習慣病に

生活習慣病医療連携パス(試案)





向き合うためのツールとしても活用 できるものにしていきます」(臼井 先生)

連携パスの作成、運用にあたって の主な課題は高い実用性の確保と、 いかに普及させ、どのようにして使 用を継続させるかの3点だろう。

「前任地で導入していた連携シート は、地域の診療所の先生方へのアン ケートにおいて8割程度で好評価で した。今回の連携パスは、記述欄を 極力少なくしてチェックボックスを 多用するなど、記入していただく方 の負担がより減るよう工夫します。

また、連携パスの実用性を高める ため、HbA1c、血圧、血清脂質値 のゴール設定の欄を設け、自由に記 述できるコメント欄を大きくするな どの変更を加えます」(臼井先生)

「試用しながら改善を重ねれば、実 用性は高まるはず。そして、実用性 があるなら自然と普及し、継続使用 にもつながるでしょう」(神戸先生) 「将来的にはパスを電子化し、クラ ウドでの管理によって、複数の医療 機関のさまざまな職種が情報共有で きるような運用を検討してはいかが でしょうか。

最近、当院では院内登録した訪問 診療の患者さんのカルテをクラウド で管理し始めたのですが、たいへん 便利。紙ベースのパスと、タブレッ トやスマホで閲覧できる検査結果の データを併用するようなスタイルも 良いと思います」(古川先生)

「紙ベースのパスのメリットとして 受診時に患者さん自身が持参し、検 査結果を医師と一緒に確認すること で、治療に対する自覚を促し、必要 な検査を漏れなく実施するのに役立 つ点があります。これらのメリット がかなえられれば、紙ベースかデジ タルかにかかわらず、医師にも患者 さんにも受け入れられ、普及するは

ずです」(榊原先生)

いろいろな意見が交わされた後に 岩田先生から、次のような発言があ

「以前、ある病院にがんの患者さん を紹介したとき、退院後に逆紹介い ただき、連携パスで治療を継続でき ました。専門でない難治性の疾患で あっても、自分が主治医であり続け られるのは非常にうれしものです。 おそらく、きちんと使える連携パス なら、普及については心配ないでし よう。

また、今日のようなオープンな意 見交換会や勉強会を随時開き、そう した集まりをきっかけに病院と地域 の医師とが徐々に関係を深められれ ば、連携パスの継続も実現すると確 信します」(岩田先生)

地域の医療スタッフを対象に ワークショップ開催を予定

センター専用紹介状や連携パスを 用いた生活習慣病医療連携システム を構想する中で、臼井先生が、さら にあと1点、力を注ぐべきは充実し た人材育成の取り組みだと語る。

「糖尿病診療は、多職種のチーム医 療なくして成り立ちません。ですが 当センターにおいてもまだまだ専門 知識を持つ人材は不足しています。 さらに患者さんの高齢化が進めば、 医療スタッフのみならず、介護・福 祉分野のスタッフにも糖尿病の知識 は必須となってくるでしょう。そこ で、医療、介護、福祉に従事する多 職種を対象に、地域全体で糖尿病の 啓発や教育を行っていくことが重要 です」(臼井先生)

臼井先生は前任地時代から、患者 の血糖自己測定(SMBG)の変化グ ラフを使って、医療スタッフが薬剤 調整や療養指導を学ぶ実践的なワー

クショップを開催してきた。

「近い将来、神奈川区でも、同様の ワークショップを開催したいと考え ており、医師会を通じて地域の先生 方や医療スタッフに参加を呼びかけ ていくつもりです。また、ワークシ ョップに限らず、地域の先生方やス タッフの方々とともに学び、情報共 有できる機会を積極的につくること で連携を深めていきたいと願ってい ます|(臼井先生)

県病院の生活習慣病センターが開 設したあかつきには、生活習慣病の 地域医療連携システムも、確かなか たちを現すことだろう。

社会福祉法人恩賜財団 済生会神奈川県病院

〒221-8601

神奈川県横浜市神奈川区富家町6-6

TFI: 045-432-1111

医療法人社団若梅会 さかきばらクリニック

神奈川県横浜市神奈川区白幡向町6-29

TEL: 045-435-1961

いわた内科クリニック

〒221-0823

神奈川県横浜市神奈川区二ツ谷町6-3

TEL: 045-317-8166

医療法人MYクリニック 神戸医院

〒221-0802

神奈川県横浜市神奈川区六角橋4-1-1

TEL: 045-491-0137

医療法人財団俊陽会 古川病院

T221-0021

神奈川県横浜市神奈川区子安通2-286

TEL: 045-441-3366